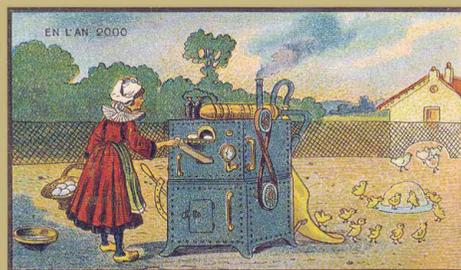


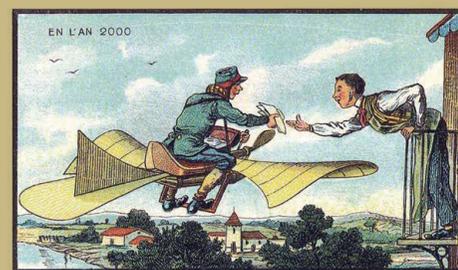
1900年のパリ万国博覧会のためにフランスで制作された2000年の世界を描いたイラスト。  
[A reproduction of the early 20th century] Jean Marc Cote



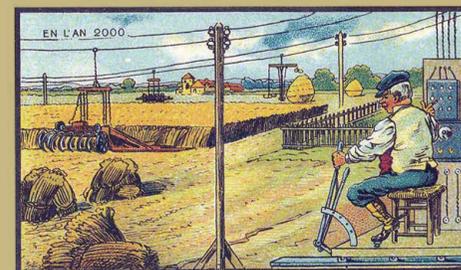
Intensive Breeding



A Race in the Pacific



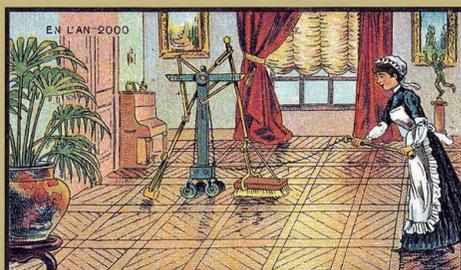
The Rural Postman



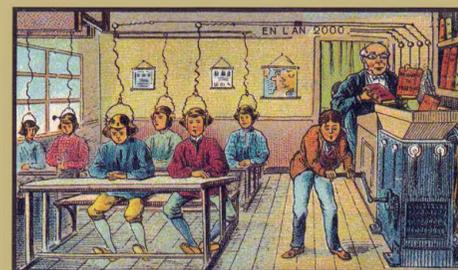
A Very Busy Farmer



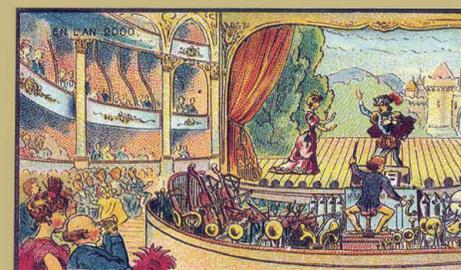
The New-Fangled Barber



Electric Scrubbing



At School



A Well-Trained Orchestra

イントロダクション

## 人間拡張の原理を超えて メディアの歴史から読む未来

服部 桂

(ジャーナリスト)

人類は、地球に誕生してからというもの、常に拡張し続けてきたと言っても過言ではない。だが、テクノロジーの急速な発達によって、これまでとは異なる概念の拡張が次々に生まれ、現実のものとなりつつある現在、我々は人間拡張について、あらためて考えてみる必要があるのではないか。そのためにも、人間拡張の歴史を振り返ってみるところから始めてみようと思う。



『メディア論—人間の拡張の諸相』  
マーシャル・マクルーハン著  
(みすず書房)

『人間拡張の原理\*メディアの理解』(一九六七/竹内書店)。メディア論で有名なカナダの文学者マーシャル・マクルーハンの著『Understanding Media: The Extensions of Man』(一九六四)の初訳本は、メインとサブのタイトルの順番が原題とは逆になっていた。当時は「メディア」という言葉がまだ一般的でなかったために、邦題ではサブを先にしたという。この本はベストセラーになったものの版元は倒産し、その後一九八七年に『メディア論—人間の拡張の諸相』(みすず書房)という題で改訳された。

現在ではメディアという言葉も定着し、マクルーハンを論じる際には新訳が引用され、タイトルにある「人間の拡張」という言葉は理解されないうまま忘れ去られているが、マクルーハンのメディアの定義は、まさに人間の身体や感覚を拡張する、言葉からメディア、コンピュータまでのすべてのテクノロジーを指していた。

この定義はオリジナルなものではなく、文化人類学者のエドワード・T・ホールが『沈黙のことば』(南雲堂)で述べている「今日、人間はかつて自分の身体で行っていた作業のほとんどすべてを拡張する技術を開発した。武器の発達は歯と拳骨からはじまって原子爆弾で終わる。着物と家屋は人間の生理的な体温調節機構の拡張であった。家具は地面にしゃがみこむ動作にかわった。電気器具、双眼鏡、テレビ、

この続きは本誌でびびりぞー!